

清浄初集

三編

中

^ 13
3170
8



門 へ 13
3170
8
卷

清談和歌翠卷之八



第十五回

叢蘭香さむらぎとさるといふ。秋風あきかぜを破やぶるといふ。か
らからら二十にじゅうふふ。是こゝぬぬ處ところ女に不ありまらず。人ひと怜あはれれ判はじりしる殊こと
をを送おくるる月つきと日ひ也なり。尾お
ぞぞ前まへ世よの物もの未まだだ。身みの命いのちと後あとてて。光ひかり情なさけををすす
はは受うととせせ。物もの未まだだ。病やまむむ人ひとをを看み病やまああららの

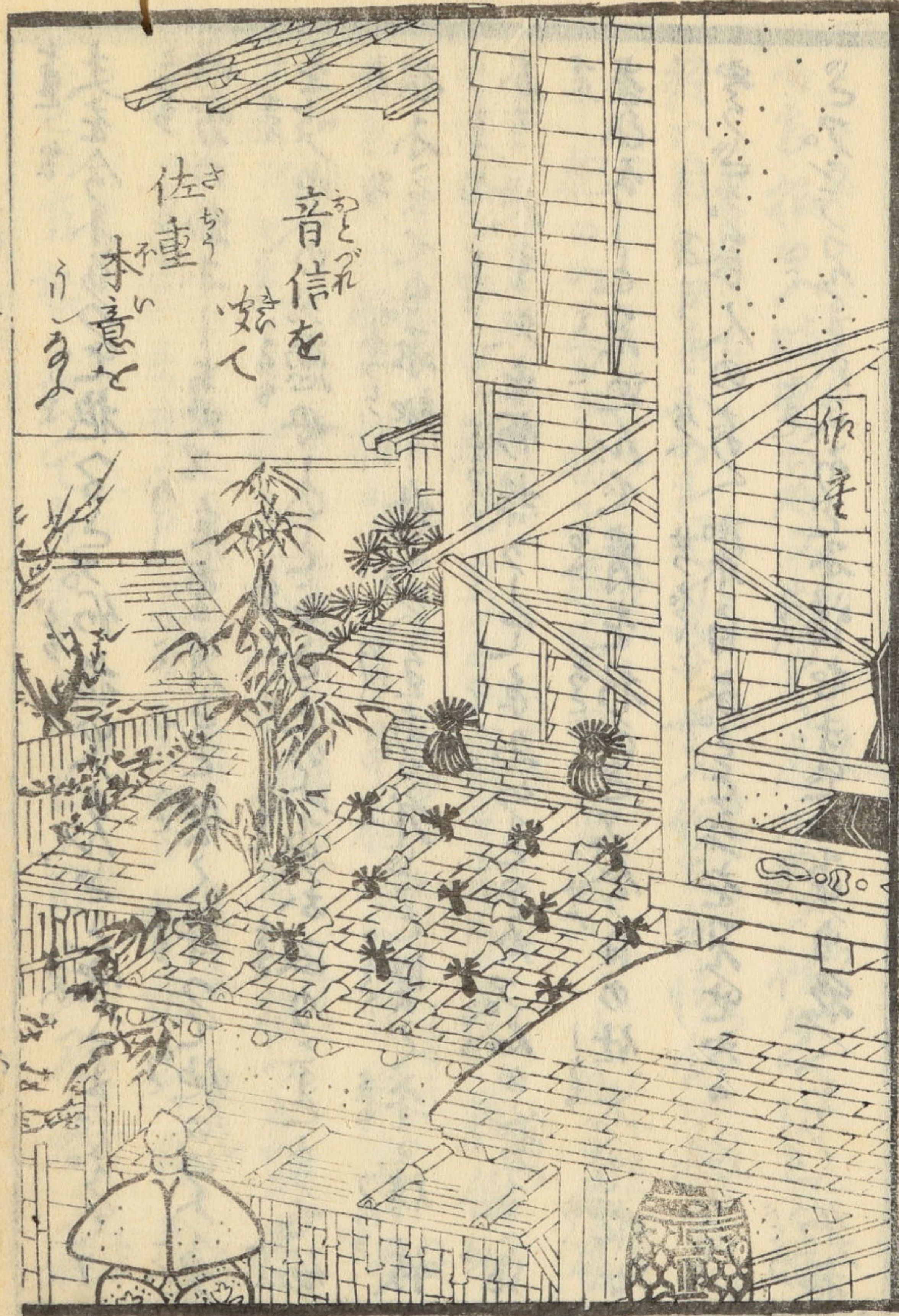
昭和十年
六月二十日

此の業。川竹の流の身不。少一勝る。劣る。この
 差別。ゆき。又。揺の。堅き。んと。つ。げ。え。不。流。氣。を。驚
 く。酌。り。女。倘。疑。ひ。も。傳。ん。と。良。人。の。氣。さ。る。こ。ろ。も。
 その。お。ろ。ふ。依。ま。ぐ。も。信。ん。と。由。あ。ま。る。て。来。の。野。と
 あり。山。城。の。地。不。ふ。ま。る。者。ら。か。ら。ぬ。る。を。探。之。す。
 愛。女。ら。ぞ。不。依。ま。る。皆。く。あ。り。て。涙。を。拭。ひ。一。昔。併。へ。の
 不。由。ま。る。あ。の。ろ。も。ろ。く。吾。と。あ。位。あ。る。も。食。を。し。て。也
 と。及。ま。り。と。あ。て。見。ま。る。ま。る。を。処。不。折。磨。あ。と。有

ますね。作。を。ろ。最。世。幸。抱。き。ま。せ。う。更。ご。ろ。公。お。振
 由。う。情。出。し。某。由。あ。る。ま。る。我。勝。と。お。版。中。流。心。あ。る
 して。公。の。を。ろ。二。十。日。由。年。ま。る。徐。く。と。歩。み。ま。る。や。ら。不。お
 成。家。さ。い。も。振。ま。る。あ。ま。る。今。ま。る。不。昔。芳。を。し。し。申。變。由
 あり。何。振。不。ら。ま。る。し。し。ま。せ。う。一。何。も。由。一。回。見。振
 快。多。の。て。の。恩。ど。し。由。せ。あ。ま。る。あ。り。あ。り。妙。し。て。後。を
 藤。て。ま。る。り。振。て。種。く。小。考。へ。る。と。と。か。あ。が。可。電。さ。り
 不。疎。不。氣。の。毒。を。あ。る。れ。ろ。て。ど。ろ。由。身。が。操。る。

人サ「アアお婆あさの指で替へて口は後をひきまへと。は推
 ぶものを世帯つらつらけのあひ替へ替へて返してかきまへと。きり
 由つとせぬ。挨拶サ「アアお指の後。まてと。大うと。た
 指でございませうらうら。お千さん彼時ハ。き二。致さまへて
 寄うらと。あつと。お指サ。まて由おあの気たう。きん。抱
 きて居て。実不ま。膝まのどりの。何指の地帯さん
 今由親あさんで。笑つちやア指と。想く。アア何ごう。美
 りきご。救う。指ぢやア分らぬ。よく群小指め。う。

指を窮して。使せね。エト。おまてお万の声を低め。一位一什
 を助くと。在のま。お借りて。アア。彼指お狂人ハ。お
 お指止。おあまひ。あさ。女のお。ま。ま。由。あ
 へ。怒。一。又。由。病人。切。あ。さ。う。と。け。き。と。記。返。の
 人。款。を。あ。さ。う。誤。ま。の。う。ら。ん。ど。う。う。昔。併。ど。の。些
 氣。を。さ。う。垂。し。て。油。ら。う。と。ま。る。と。の。息。を。振。替。へ。ん
 復。く。サ。あ。ん。が。あ。い。雲。の。痼。癩。が。病。ひ。ご。と。の。し。ん。ん。ん
 ど。彼。指。を。奴。を。抱。く。膝。へ。些。氣。の。う。ら。ん。ど。を。由。あ。



まを今もあつて抱るとも何れか見んとせよと云ふは
此方の物不しち也。をある身と堅く守つて他の身
を破れぬの。憑母ふと云ふことのみ。お政由さまを
振ふ云々の。承知し終への。ある身と堅く守る律儀
あり。張る。処を何れか見んとせよと云ふは。人の
者み。いと。兄。迎ん。心。骨。を。折。の。ご。ろ。今。日。の。仕。事。も。惜。い
やう。ご。ろ。身。人。の。あ。く。潔。白。な。と。ころ。を。見。せ。やう。と。云。ふ。ん
ご。ア。シ。ラ。コ。ン。ま。は。り。と。不。惜。む。ま。ま。の。り。ゆ。ゆ。と。云。ふ。は。振

心も振る時宜也。あつて急なア性もけり。けり。と。振
終へ。自。己。が。不。し。ち。と。云。ふ。は。何。れ。ゆ。え。情。念。の。振。え。
幸。抱。の。の。方。が。不。遠。く。不。れ。ぬ。ゆ。え。と。云。ふ。は。振。る。来。歴
も。ひ。き。出。し。て。版。を。と。り。と。容。の。あ。け。ま。は。友。個。を
あ。き。ま。し。何。れ。振。る。と。云。ふ。は。幸。抱。也。昔。情。と。い。は。振
ご。ね。エ。と。云。ふ。は。尤。不。成。干。也。彼。鬼。不。務。つ。と。云。ふ。は
ぢ。や。ア。ご。ご。ま。ま。せん。う。一。ヤ。サ。を。処。が。相。縁。奇。縁。あ。あ
ご。の。に。振。る。ゆ。ゆ。と。云。ふ。は。ま。ま。と。自。己。が。目。の。見。ゆ。ゆ。と。云。ふ。は。不。化

不勝このりマア 移へ。何れかありあう。藤七のきよき
些のりすまる間あり。是の何れも。因果どらうト小
首傾げて多く不。おりの切なき。容少くも。お万
か千のん程少く果する。あう多。詮方多。除き
多。くひとある。却て。昔。憐。憐。をうけ。黄金の蔓
を失ふ人あり。とまう。結。やう不。云。釈て。一。元。あり。是
う。ま。と。性。七。室。女。と。何。れ。か。お。智。ら。ず。お。坐。後。へ
お。や。う。不。ま。く。云。て。集。り。ま。せ。う。う。一。元。あり。何。れ。か。率。在

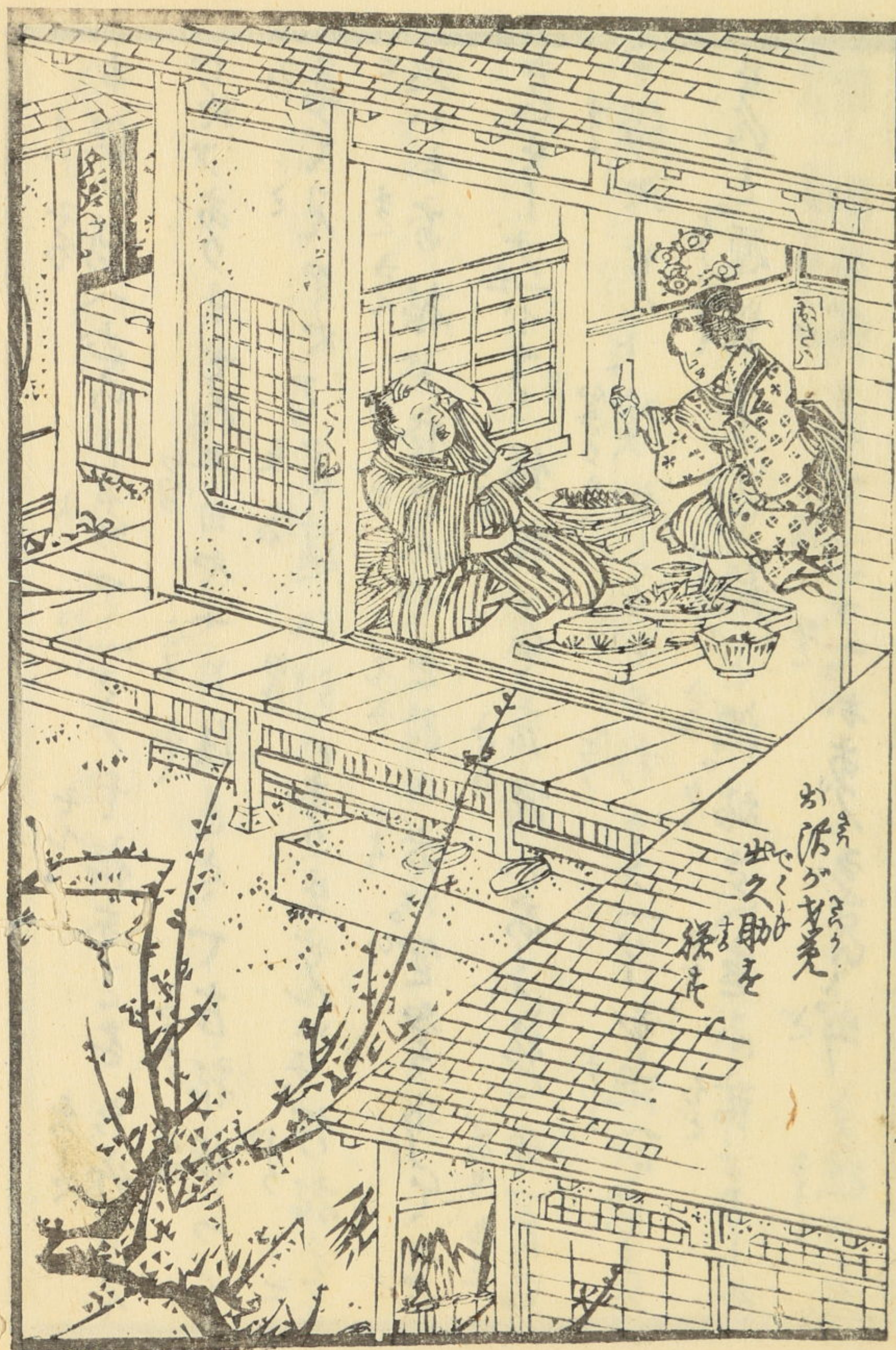
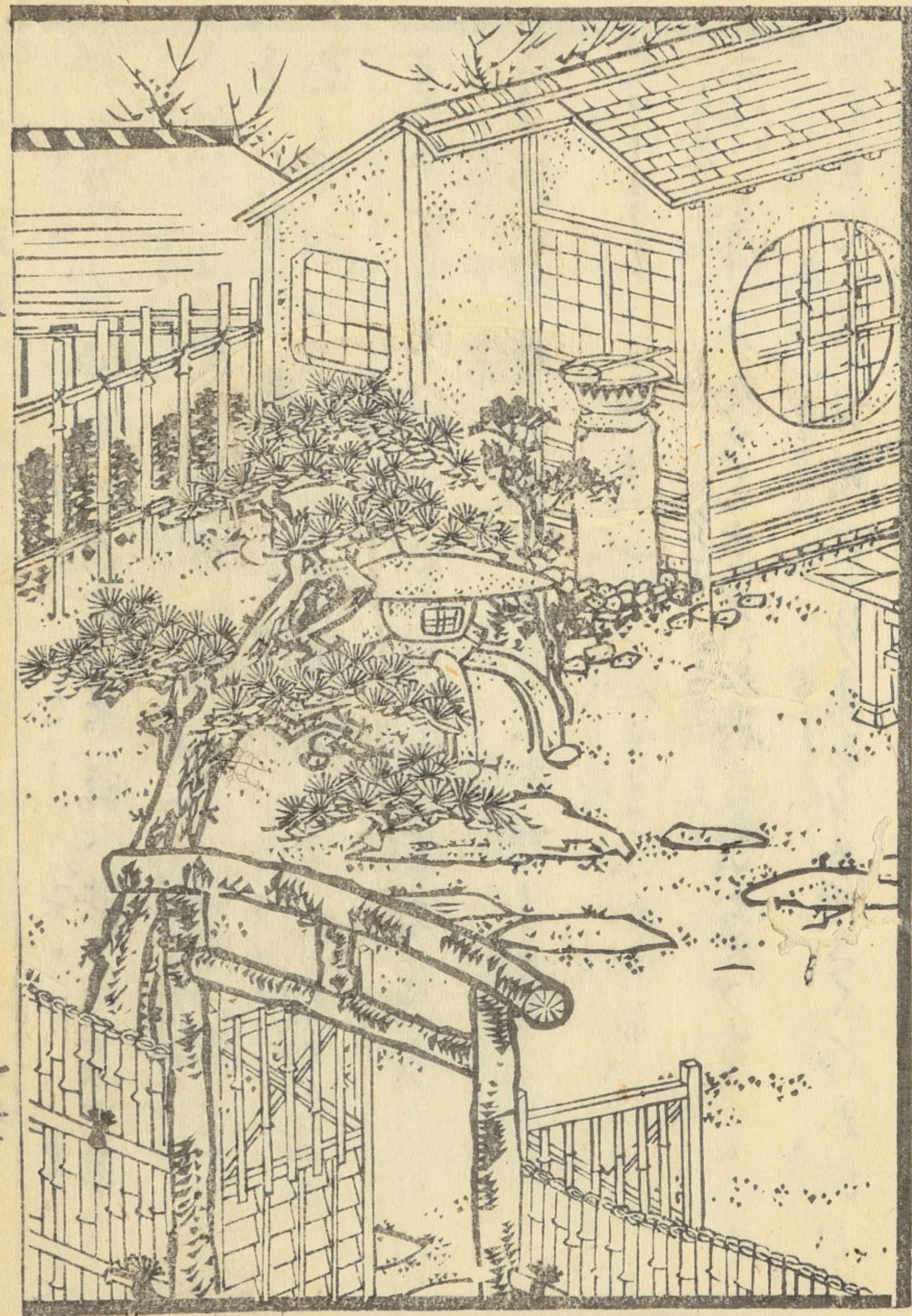
振して異。未。身。人。の。あ。が。た。ア。些。き。一。念。ど。う。モ。シ。又。宜。石
が。あ。つ。と。あ。う。ま。は。さ。う。う。信。ま。さん。の。構。い。あ。い。と。お。云。と。う。多。
ん。死。す。不。出。て。未。未。と。う。く。在。振。云。て。え。未。せ。ん。ト。情
ま。ま。て。息。改。あ。個。ま。と。隣。へ。と。出。て。や。く。お。改。い。在。せん。在
せん。と。る。心。悩。ま。て。氣。苦。芳。の。病。の。隙。と。知。り。ま。う。
誰。不。信。ら。ん。人。あ。け。ま。ば。良。人。と。枕。の。傍。不。う。成。ら。う。と
あ。う。この。宿。本。を。止。めて。巧。ま。う。あ。る。あ。う。ば。何。れ。か。振。る。續
き。の。水。瓶。女。の。業。由。さ。う。く。厭。い。ぬ。不。張。さ。て。何。れ。か

今日本秋多葉菜の露毒無くとかゆていふ小松
 て春とシゴア一ツやくをきぢアお政さぬら。お極う不あり
 まうら一まご知らぬく昨日の物まのまうと極つと
 をき不物て旦那の急こと今相まゆく性て網菜の
 目をさうきめて素いとあふも。をきをきと素とシゴア一
 ラ右振をさるひますう。をきをき、モウかちてさうとさ
 ます。あう一子へ伴政さん。をきあちアさく素とて困
 つとあうあります。ヨ一何ごとく困つとあうとマ一昨日急に

四隠長さんい。お誘引あさいきて。横のあう様々金
 沢殊小あさう。お根の湯へ。二とらをさゆ運入らとて。
 ちんちん小あさいまうと。右振してアるとマ。素あ。お帰
 りいぢいけません。お根へおまうらあさうあいとまう。七月の八
 日のお掛。あさいませう。一アアとアとんとら。一ヤあう
 一あう。一あん自己を控いごナ。ヨヤ物で空をまう。一
 ませう。一をさゆ。おあ根が。出て。飯中汁。ゆ盛てあるト。
 けをさてお涙い。おが。つひど。そ。処をさう。さぬ。年。端。女

の功者一とてごころおお振。なげ振を振るにてごごい
またト不束の機類の交りく「とつて」ア「まア」何振
でも官が。ゆくと近々納某の相違不の信らといふと。
お出なせんと約束一あがら。その日不振島出なせとア。
勝まり人を白痴と。仕おぢぢアあるめへかまら
何振由論方が振へ。おましく帰つて。目形不古振とい
モ。目形が振立て。何とくは作アア振島へおぢ
飛御を立て味返さるサト西を變つて立不かるを。

お伏へ傍へおらとあア「ア」サを振おとをな作らうん
おぢアありません。五日や十日後とて。古振極つて
振て見えアア。石遠ひ引へおりませんハ子。何振を
処におお振ダ。呑みえで目形の方ハ。官やらあしてご
まひま「ナイ」や。何振とて古振ハあう振く。身一自己
が海でせんト。憤切らるそのおらう「ナイ」お維へごごり
せん。と。原器多とて殺と酒。燭さ。壺不節ダ。ア。お
伏へ強出精らて「マア」ッおあんあさ。ト。出ら振にを



お清かき
出久助を
様片

新川

十一

宣のとのけ。勿も強あ業あをい世せ持も人に世よるに不ふ辨べのぬ所しよが
 法は宣のど。且ま物ものの方への何なにとう云いて。立た日ひや十日にちの侍せんか
 何なに振ふるのうと出で久く助すけが。古ふる由よしまらぬま振ふ
 振ふかは法はいちとうと於勤きんめん。その夕ゆふ暮ぐらに返しけり

清談和哥翠卷之八 終

